

所 陵

ISSNO 0913-1906

No.19

関西大学考古学等資料室彙報

平成元年5月31日発行



縄文土器（青森県亀ヶ岡遺跡出土）

目 次

祇園精舎跡第3次発掘調査の概要……………	2
イラン人のイラン考古学者……………	6
寧遠州から山海関へ……………	8
遺跡の景観と視界……………	10
昭和63年度調査報告「石川・福井」の遺跡及び博物館施設……………	12
小野勝年先生ご寄贈「秦始皇陵出土瓦当」資料……………	14

祇園精舎跡第3次発掘調査の概要

一日・印共同学術調査の成果一 網 干 善 教

関西大学創立100周年記念事業として実施してきた、インド政府（考古調査局）との共同学術調査「祇園精舎跡の第3次発掘調査」を終了することができた。

わが国では『平家物語』や『今昔物語集』等で知られる祇園精舎跡はニューデリーの東約600km、ウッタル・プラデッシュ州の北辺、ネパールとの国境に近いところにあつて、サハート遺跡（ジェータヴァーナ）とも呼ばれる遺跡である。

関西大学では国際的な学術研究の目的をもって、日本人に親しまれ、かつ重要な仏教遺跡である祇園精舎遺跡を発掘調査するため調査隊を派遣することになった。

調査隊はインド政府との協定に基づき、1985年から86年に予備調査を行い、86年から88年にかけて発掘調査を実施する計画で着手した。しかし、87年から88年の発掘調査によって、西北地区（Aエリア）で沐浴池を検出し、その東隣接地（Bエリア）で1辺20m近い仏塔と僧院跡、中央地区（Gエリア）では僧院と寺院・奉献塔、そして煉瓦敷床面などの重要な遺構の埋蔵が判明した。したがって第2次の5ヶ月の現地調査

では不十分であり、大学当局の格別の配慮により調査隊の派遣計画を1年延長し、88年から89年に継続することになった。

そこで調査団は第3次発掘の派遣調査隊を編成し、本隊は去る1988年10月14日出国、直ちに現地に向かい、作業を開始、1989年3月22日の帰国まで約5ヶ月間にわたる発掘作業を行い、協定に基づく日・印共同学術調査を終了した。

また、第3次発掘調査は野外調査の他に、前年度の第2次及び今年度の第3次調査出土遺物に関する資料の整理作業を併行して実施した。

(1) Aエリア

第3次発掘調査では、昨年度までに検出した沐浴池の東辺の一部・西辺・北辺から得られた知見に基づき、残りの部分の発掘及び昨年度調査時のセクション観察用の幅1m畦の除去を行った。発掘面積は約500㎡である。

昨年度の調査において沐浴池の内部に至る階段の存在が、西辺で1ヶ所、北辺で2ヶ所を確認していたが、今年度の調査で各々の対照となる位置、すなわち東辺で1ヶ所、南辺で2ヶ所の階段を検出すると同時に、部分的な検出に留

まっていた北辺の階段部分も基底部まで確認した。階段部分の構造は6ヶ所とも基本的には同じであり、沐浴池の壁に切り込むように作られた階段部分とそれに続くスロープからなる。

今回の調査で検出した沐浴池の東辺と南辺部の遺存状態は予想より悪かったが、沐浴池の構造を知る上では有意義であった。沐浴池の外壁は上まで煉瓦を積み上げた部分と、粘土と煉瓦片を充填した



Aエリア 沐浴池

後に完形の煉瓦を上部に敷いた部分が認められた。また、東南隅には導水路も検出した。

煉瓦の改築・改修は最低2回にわたって行われており、それは階段部分においても同様であるが、沐浴池が本来の機能を有していたのはクシャーン朝期に限られると思う。

(2) Bエリア

第3次発掘調査の主たる目的の一つは、第2次調査で検出した1辺約20mのストウパの東と南に遺存することが予想される僧院遺構の発掘を行うこと、さらにストウパの中心部にトレンチを設け、塔の基壇の構造を調査することであった。

調査は先ずストウパの東側で南北方向、幅5m、長さ30m（面積約150㎡）を発掘した。ここでは第2次調査で検出した遺構と接続する煉瓦壁の僧院跡を検出した。なお、これによって、ストウパの東限を確認したと思う。

ついで、調査はストウパ西南部の前回の未調査部分約150㎡と、ストウパ南側で東西方向に幅5m、長さ40m（面積200㎡）を発掘調査した。

次にストウパは上に残っていたセクション観察用の幅1m畦を全部取り除く作業から開始、続いて中心部と基壇の構造を調べるために中心部については円形に煉瓦の敷かれた部分の第1象限と第3象限を発掘することにし、それに沿って南北方向に基壇を発掘した。その結果は以下のようなことが明らかになった。

1. ストウパ東側の僧院跡

第2次調査で検出した塔の東側に接続する僧院跡の壁が経年的に改築・改修が繰り返され、複雑な状況がみられた。しかし、重要なことはストウパの東側僧院の東限をなす壁と思われるものを検出した。したがってこれより東側に遺構があるとすれば、それはNo2寺院跡の西側でカニンガム卿が発掘した地区のものとなつてつながる可能性もある。

なお、ここでの最下層の遺構はクシャーン朝であり、遺存する主たる遺構はグプタ朝及びポスト・グプタ期のものであった。



Bエリア ストウパ

2. ストウパ南側の僧院跡

ストウパ南側では最下層にクシャーン朝期の煉瓦を使用した僧院遺構がある。しかし、その上にグプタ朝以後の遺構が重なるため実態が明確ではない。グプタ朝に少なくとも3回以上建て直された遺構がある。そのうち第2期と思われる遺構は明らかに僧院の部屋を仕切る煉瓦壁で、各部屋の割付は多少の広狭はあるが、復元すれば11室が並ぶよう見ることが出来た。

なお、この僧院はストウパに伴う一連の僧院であって、南限を示すものと思われる。従ってこれより南に遺構があるとすれば、それはストウパ区域とは別のエリアに属するものであろう。

3. 塔の基壇及び中心部の発掘

前年度調査の終了時には塔を中心とするエリアにセクション観察用幅1m畦が残っていた。今次調査はこの畦を除去する作業から開始した。この作業によって仏像片の出土や、塔の東端に半円形の煉瓦敷施設などの検出があった。1m畦を除去することによって塔基壇の全容が姿を現し、補足的な調査と実測図の作成の後、塔中心部の発掘に着手した。

中心部の第3象限では、煉瓦床の下、約60cmの焼土と瓦の堆積層があり、その下70cmにクシャーン朝期の煉瓦を用いた僧院状の遺構を検出した。この層序には攪乱された形跡

はない。

また、第1象限では煉瓦床下60cmでグプタ朝の煉瓦壁の遺構があり、さらにその下にクシャーン朝の煉瓦壁の一部を検出するなど比較的安定した層序であった。ただ、南側セクションには大きく深い掘り込みがあり、焼土を含んでいる状態がみられた。基壇のトレンチの南側の断面にも焼土のピットがあった。

以上の結果から、塔が築造される以前クシャーン朝には僧院遺構があり、その上にグプタ朝になって僧院が作られた。さらにこれを整地した上に現在見ることの出来る塔の基壇が構築されたものと考えることが出来る。

なお、塔の中心部には舍利埋納に関する遺構・遺物はみられなかった（ちなみにインドの仏塔の場合、舍利を収めない型式の仏塔がある）。

(3) Gエリア

第2次調査で一部検出した煉瓦敷床面、奉獻塔などの詳細を知るため、既往調査区域の南側を拡張した。さらに周辺にトレンチを設定し、遺構の広がり、層序の確認なども実施した。

その結果、新たに小規模な奉獻塔4基・沐浴池1基・寺院・僧院跡などを検出した。

1. 奉獻塔群

第2次調査で奉獻塔1基を確認していたが、今回の調査でその周辺において、新たに3基の奉獻塔を検出した。

現状では直径2.2～2.5mの円形プランのもの2基及び1辺2.3mの方形プランのもの1基であるが、円形プランの奉獻塔の下段には



Gエリア 小寺院・奉獻塔群

装飾煉瓦を使用した方形基壇があり、方形から円形の増・改築が認められた。

また、第2次調査で検出した小寺院の下層にも装飾煉瓦を使用した方形壇があり、当初は奉獻塔であったと推定できた。

これらの奉獻塔群は連続する一定パターンの煉瓦敷床面と鞋形の隔壁で囲われ、典型的な僧院複合体（Chaitya）を形成している。時期はクシャーン朝後期からポスト・グプタ期に及ぶが、グプタ期に盛期がある。

2. 沐浴池

調査区東南隅において、新たに煉瓦積沐浴池の西北隅角部を検出した。隔壁高約0.8m、擁壁（第1段）高約1.2mである。規模確認のため、東・南に設置したトレンチ調査の所見より、長辺約40m、短辺約25mであって、ほぼ東西方向に主軸を持つ、長方形プランを呈し、A地区の沐浴池に類似した構造と推定する。

その時期はクシャーン朝前期に築造され、ポスト・グプタ期まで、修・改築を繰り返して使用されたい。

3. 僧院跡

小規模な奉獻塔群を囲むように、西・北側に僧院が3単位以上ある。ただし、狭小なトレンチ調査のため、全体の規模や構造などは不明である。

時期はクシャーン朝期より中世まで続き増・改築が繰り返されており、僧院として廃絶された跡、上面を整地して、寺院（No13・14）が構築された。

4. 南側の寺院・奉獻塔

前述した僧院複合体の隔壁外側には内側とは異なるパターンで煉瓦敷床面が南側に延びており、沐浴池の西側からさらに南側におよぶ。

これらの周辺では小規模な奉獻塔・寺院・僧院などを検出し、カニンガム卿らによる既往の調査区の奉獻塔群・寺院などに連なる。但し、狭小なトレンチ調査による所見のため、規模・範囲などの詳細は明確にし難い。



Bエリア 僧院跡

出土遺物

(1) 遺物

今年度の遺物の整理作業は、第2次調査と第3次調査出土分の実測及び写真撮影を行った。

今年度出土遺物は、総数351点を数える。昨年に比して調査面積が少なかったことにより、昨年度の約半数になっているが、ほぼ同類の遺物が出土している。それらは、土製の人物像・動物、土製・石製の玉類、土製・石製の生活用具、鉄製品、青銅コイン等である。

3次にわたる祇園精舎の発掘を通じて、総計1356点の遺物が出土した。今後、実測図・写真の整理を進めるに伴い、ウツタル・プラディッシュ州にある他の遺跡（ハスティナブラ遺跡・アヒッチャットラ遺跡等）との比較研究を進めて行く必要がある。同時に出土した土器の編年作業の進展とともに、クシャーণ朝期からポスト・グプタ期に至る土製人物像等の編年作業を実施できるものと考え、祇園精舎の全容解明の一助となろう。

(2) 土器

土器の整理は主として前年度調査において層的に取り上げた南地区と西地区の土器を中心に実測と計測を行い、それを補足するかたちで前年度・今年度に出土したその他の地区出土土器の実測を行った。今次調査における総実測数

は2000点余りである。現時点では具体的な資料操作を行っていないため、不明な点が多いがおおよその見通しとしては次のようになる。

出土層位及び放射性炭素による年代測定の結果から、今回の発掘調査で得られた土器の最古のものは西暦紀元前後に位置づけられる。

土器の時期的変遷が比較的明確に捉えられる器種としてはろくろ成形で作られた鍋形土器・鉢形土器などを挙げる。

土器の成形技法によって時代を特定することは出来ないが、各時代において特徴的な器種の抽出は概ね可能である。

以上の観点から、祇園精舎遺跡における土器の様相をある程度伺い知ることが可能であると同時に、従来に比べより細かな土器の編年案を提示することができるであろう。

(3) 建築用材

建築用材として検出したものには木材・煉瓦・施釉磚・瓦・頂華（finial）などがある。B地区ストゥーパ上で出土した炭化材は分析結果よりサラ（沙羅）の木と判明した。

煉瓦には各時期により規格の異なる通常のものとは別に、各種の装飾煉瓦がある。一方、瓦は時代的な規格変化に乏しい。施釉磚にはクシャーণ朝期に漢土より将来されたもの、同じく頂華にはグプタ朝期イランより将来されたものと推定できるものがあって、興味深い。



A・Bエリア 沐浴池・僧院・塔跡

イラン人のイラン考古学者

加 藤 一 朗

この題名で旧友ネガーバン氏 (Ezat O. Negahban) を紹介したいと思う。筆者のシカゴ大留学時代のクラスメートであり、のちイランを訪れたとき、テヘラン郊外のシミラン (わが国の軽井沢のような高燥・清涼の地) にその寓居^{ぐうきよ}をたずね一夜歓談した。年齢は筆者 (1921年生れ) より4、5才若いように思う。

大ざっぱにいつて今世紀初めごろから、英・独・仏国は、イランにむけて三様の出かたをした。イギリスは政治・経済的に、ドイツは技術的に、フランスは文化的に。これは日本についてもいえることかも知れない。戦前・戦中までわが国の医師はドイツ語でカルテを書いていたし、京都の日仏会館の活動の伝統を想いおしても、フランスの文化的進出指向を納得できると思う。筆者のイラン訪問の際も、大学教授連はフランス語を、商人たちは英語を、技術者はドイツ語を話すことを好んでいた。そういうこともあって、最近までイランの考古学的発掘・調査はフランス人が中心であった。30年にわたる仏人R. ギルシュマンによる古都スサの発掘、また彼の主著『Iran (ペンギンブックス)』を想起しただけでも、この点は証明されるであろう。もちろんこのほかにも、例えばアメリカ人によるペルセポリス宮殿の発掘等もあり、総じてイラン考古学の発達はほとんど外国人考古学者に負うていた。そして戦後ほどなく、ネガーバンが国の興望^{きようぼう}を担って米国シカゴ大学オリエント研究所に留学、メソポタミア考古学のR.

ブレイドウッドやエジプト考古学のH. J. カントーらの指導をうけた。筆者がネガーバンと一緒にになったのはこのカントーのクラスと、宿舍 (大学にごく近いインターナショナル・ハウス) 内においてであった。ちなみに事情があってカントーは現在イラン考古学に打ちこんでいる。

1957年ごろネガーバンは、在米5年におよぶ研究生生活をおえ、アメリカ婦人の妻をともなって帰国し (のち2児をえた)。彼はテヘラン大学の考古学主任教授となり、1時はテヘラン博物館の館長をかねた。イラン人のイラン考古学者の誕生である。そしてイランの大学では珍らしく英語を話すことを好む学者の一人として。

彼はついていた。彼の最初の (そして恐らく最後? の) 発掘、すなわちテヘラン北方のマリクの遺跡の発掘調査 (1961—1962) にかがやかしい成功をおさめたからである。その報告書、『A Preliminary Report on Malik Excavation』は当時のイラン文部省の特別出版物として1964年に刊行された。その一冊が「With best wishes, E. O. Negahban」という署名とともに筆者にも送られてきた。ここにそのアウトラインを紹介する。

文部省とテヘラン大学の支援をうけた彼の発掘の現場はエルブルズ山脈とカスピ海にはさまれたアザンデラン地方の一角であった。この地方は乾燥の国イランで、もっとも水と湿気に恵まれたところで、緑ゆたかであり、今日では主要な米作地帯で、日本人農業者も戦後生産指導を行なってきた。マリク=テベ (丘) は、エルブルズ山中の泉から発して北行しカスピ海に注ぐセフィド=ルド川の支流ゴハル=ルド川の緑の谷間に発見された5個のテベの一つである。現況から推察して、この地区は、古代にあって穀類や野菜・果樹・牧草に恵まれ、地方政権の発達に適していたと考えられる。特にマリク=テベは緑におおわれて、全く自然の丘の様相^いを呈し、そのためかほとんど盗掘^いにあっていなかった。遺跡の性格は、土中の自然岩や割り石、しっくいを利用して作った墓群であった。墓に



地測するネガーバン氏

は4種の型が識別された。第1の型の墓群は不規則な形をしており、大きさの平均はほぼ5 m×3 mで、人骨、青銅製容器、土器、装飾用ボタン、棍棒、メースヘッド（棍棒頭）、やじり、刀、槍のほさき、よろい、かぶと、小像類などを内蔵していた。遺物の性質から、墓主（死者）は戦士王ならびに戦士と推論された。小像類にはひょう・狼・いのししなども含まれているところから、墓主はまたすぐれた狩人であることも推論された。第2の型は第1の型よりやや小さく、矩形状であった。この墓群からの出土品では、装飾品がきわだっていた。すなわち、首飾り・腕輪・耳飾り・指輪・黄金の容器などである。したがって墓主は王妃や王女であったものと推論された。第3の型はほぼ正方形で1辺が3 mほどである。副葬品は少なく、その製作技術からして、この型の墓群は、マリク遺跡の中では初期のものと推論された。第4の型は1 m×2 mほどの大きさで、出土品は馬の歯・馬具等であり、これらはいけにえの馬の墓と推論され、このことから、この丘に眠る戦士王や戦士にとって、戦い・狩り・生活に馬が貴重な存在であったことがわかった。このようにイラン人考古学者による初の発掘が、国内の一地区に3千年も眠っていた未知？の文明を掘りあてたこと、特にすばらしい立体的装飾のほどこされた黄金の容器（写真）に日の目を見させたことは、イラン国民の間に一大センセーションをまきおこしたようである。このことは高松塚古墳壁画の発見の報に接したときのわれわれの興奮を想起させる。ネガーバンも「この遺跡は『ある忘れられた王国』の王族の埋葬地であったことは疑いえない」と結論している。

イランは広い。歴史は古い。まだまだこのような「忘れられた文明」の再発見の可能性は大きい。しかしそれは将来のことである。現在のところネガーバンの掘り起した文明は、考古学的に孤立しているといわざるをえないが、遺物の質・製作技術・芸術性などにかんがみて、彼は「この文明は、紀元前2千年紀後半から前1千年紀前半にかけて、数百年にわたって栄え、そして消えていったものと考えられる。そしてマリクは王族の埋葬の地であったので、近くのテペには、彼らの王宮の跡が眠っているかも知れない」と暫定的にのべている。



黄金の容器（高17.5cm
量 226g）

さてそののちイラン革命が起った。筆者の彼との接触の印象からも、彼は地主階級に属していたようである。国外に出ざるをえなかったのであろう。一時彼とその家族の所在は不明であったが、現在米国ペンシルバニアに住んでいることがわかった。彼とペンシルバニア大学との関係は未詳であるが、最後にその報告書の言語について一言する。実はこの報告書は、左開きに英文で印刷され、右開きにはペルシア語で印刷されている。筆者は英文のところだけしか読めなかったことを告白するが、報告書の一部をペルシア語の専門家に読み比べていただいたところ、英文もペルシア文も内容はおなじものであるという確認をえたので、私の読み方も大きな誤りをおかしていないと信じている次第である。

寧遠州から山海関へ

松 浦 章

1988年8月、中国遼寧省の興城からマイクロバスに乗って、明清史を専攻する筆者にとって一度は行きたいと思っていた山海関に赴く機会を得た。興城から山海関までのこの路はかつて明清時代において、朝鮮国の使節が北京へ往返に幾度となく利用した道であった。この経路の現状の一端について述べてみたい。

1 寧遠州城 遼寧省の興城には明清時代に築城された古城が残されている。この古城は明代には寧遠衛城として宣徳3年(1428)に築城され、清代には寧遠州城と呼ばれた。^①

明代末期には東北に興起した満洲族の南下を防御する一大拠点となった地である。現在も明清両代に涉って築城、修築された城郭が残されている。広大な中国でも明清時代の城郭を現存している数少ない地の一つである。

康熙『錦州府志』卷三、建置志一、城池によれば、その規模を以下のように記している。

週圍五里一百九十六歩、高三丈、池週圍七里八歩、深一丈五尺、門四、東曰春和南曰延暉、西曰永寧、北曰威遠。

とある。周囲は約3.2km、高さ約9m程で明清時代にはその城壁の周りに護城河即ち堀が約4kにわたり繞らされていたが、現在ではその堀は姿をとどめていない。ほぼ正方形で各辺中央に路がありそれが十字に交差している。その路は東は春和、南は延暉、西は永寧、北は威遠と名付けられた門を経て城外の道に通じている。城壁は明代の上に清のものが修築され、今日にその姿を止どめている。城内の東西、南北路が

十字に交差する地点に鼓楼がある。鼓楼より南の延暉門に至る南街に二つの石坊がある。

道光12年(1832)到北京への使節として寧遠州城に入った金景善はこの石坊を見て次のように記している。

祖家牌樓、世所稱燕行寄觀之一、今見信然。一是祖大壽樓立於崇禎辛未、高可十余丈。最上層内外扁皆大書玉音二字(中略)一是祖大樂樓立於崇禎戊寅。高比大壽樓少遜。^②

祖大壽樓は崇禎4年(1631)に、祖大樂樓は崇禎11年(1638)に建立された。祖大壽、大樂は同地の出身であった。祖大壽樓の方が大きく、写真(1)でも明らかなように前面(南側)が祖大樂樓、後方が大壽樓であり、その背後に屋根が見えるのが、旧寧遠州城の鼓楼である。

2 中前所城 興城古城、旧寧遠州城より南西約80K程の地に明代に築城された中前所城の城壁が残されている。現在同地は前所と呼ばれている。康熙『錦州府志』卷三、城池によれば、明宣徳三年、指揮葉興建、週圍三里八歩高三丈、(中略)門三、東曰定遠、西曰永望、南無字。

とある。宣徳3年(1428)に指揮の葉興により築城されたもので、周囲約1.7km、高さ9.6m程の城壁があった。東に定遠門、西に永望門があり南にも門があった。現在は城門と城壁の一部や、城壁の基礎部分の土壁が残されている。

中前所城の旧時の状況の一端は、金景前が、至中前所、於路中、望見西北山勢、(中



写真1. 興城古城(旧・寧遠州城)城内南街



写真2. 前所(旧・中前所城)

略) 長城隨山曲折、或見或隱、令人意想益豪健、捨城外直路、從城東定遠門入城。周可八・九里、閭井櫛比、過四街牌樓、出城西永望門外、止宿。^③

と記している。東方より中前所附近に到ると山海関に連なる長城が山脈に添って見え隠れしていた。金景前等一行は中前所城の東の定遠門より入城し、城内を通過して西側の永望門を出て門外に宿泊している。

3 山海関 東北地方と関内を分つ基点が山海関である。山海関附近の地勢を、朝鮮使節朴趾源は、

太行山が北へ走って医巫閭山となり、(中略) 長城は、医巫閭山からくねりながら下り、角山寺に至っている。峯々にはみな小高い台があり、平地に入ってから関(山海関)が置いてある。長城にそって15里行くと、南方は海に入っている。鉄を熔かして土台をつくり城を築いてあった。三簷の大

楼を上建築して望海亭と命名していた。^④と記すように、山麓は角山附近で平地となつてはば南に海岸が逼っている。この地形を利用して、角山から約3kmで山海関がある。同関からさらに南約5kmで海に至り老龍頭と呼ばれ、そこに朴趾源が望海亭と記している楼があつて長城の南端が海に突き出ており、海岸に添って長城を越えることを阻んでいる。

【山海鈔関権政便覧】巻一、設関に、

盛京等处兵民、居住甚密、商人出山海関、去売紬緞布疋茶葉等物、將盛京等处出產之物、買進山海関貿易者亦甚多。

とあるように、山海関を経て関東に行った商人は、関内産の絹織物、反物、茶等を東北にもたらし、帰りには東北産の物産を得て山海関に戻った。山海関は陸路による関内、関東相互の



写真3. 山海関(天下第一関)



写真4. 澄海楼より見た長城の南端

物資の流通基点でもあった。

山海関より南に行くと、

亭一名観海亭、一名澄海楼。^⑤

とある観海亭即ち澄海楼がある。同楼は、

鎔鉄灌海中為址、築城其上、城根之入海者、恰為五・六十間、亭在其上。^⑥

とあるように、海中に熔かした鉄を流し入れてその土台を作ったのであり、軟弱な地盤に強固な建造物を造る上で当時としては画期的な工法であつたろう。

以上、興城古城、旧寧遠州城より山海関まで約100km余の距離を今日では自動車で2時間余で行くが、前述の朝鮮使節金景前等の一行は、道光12年(1832)12月8日に寧遠州城に到着後、翌9日には中右所、中後所、10日に中前所、11日に山海関へ到着するまで3日を要している。^⑦

【註】① 康熙『錦州府志』巻三、城池。『今日興城』(興城県旅游接待処、1983年8月前言)。

② 『燕行直指』巻二、祖家両牌楼記。③ 同書巻二、壬辰(道光12年)12月10日条。④ 今村与志雄氏訳『熱河日記』1、平凡社東洋文庫325、1978年、238頁。⑤⑥『燕行直指』巻二、望海亭記。⑦ 同書、巻二。



写真5. 澄海楼(尾根部分)と長城の遠望

遺跡の景観と視界

山口 卓也

先史時代の遺跡が記述される場合、まず「環境と立地」の項目が触れられる。ここでは、周辺の地形や自然環境、関連しそうな他の遺跡が取り上げられ、それが遺跡立地の説明とされている。普通、遺跡周辺地形図が一枚掲げられ、また遺跡の遠景と近景の2枚ほどの写真が添付されるであろう。しかし、これだけの記述では、遺跡の環境と立地を説明するに不足であり、欠落している重要な情報と視点が残されていると考える。

遺跡の立地は、先史時代の人々によって行なわれた行動の目的に合うよう、選択されたものである。考古学的調査によって彼らの行動が完全には復元できないことから、われわれが記述する遺跡周辺の環境は、われわれの意識において理解されたものにすぎず、当時の人々の認識と環境そのものではないことを銘記しなければならない。

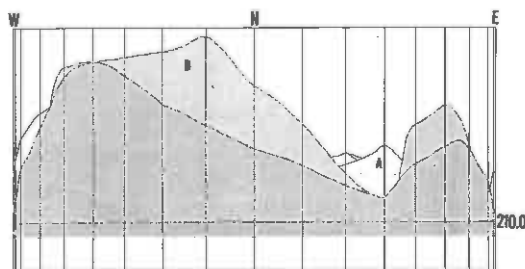
自然環境そのものは、自然科学的関連諸学との共同によって解明できるであろう。続いてもう一方の、その地点を選ぶことになった当時の人間の周辺環境に対する認識がどのようなものであったかが問題であろう。現代と当時の人間の意識の差を埋めるものとして民族誌の援用などの方法がある。そのような検討にいたる前提として、まず従来記述されていなかった問題を指摘し、今後考古学的事実の記述を更に充実すべきであることを提起したい。

まず、遺跡の周辺環境を記述する上での「レンジ」の問題である。本稿ではこの問題に深入りしないが、遺跡の立地環境にはいくつかの段

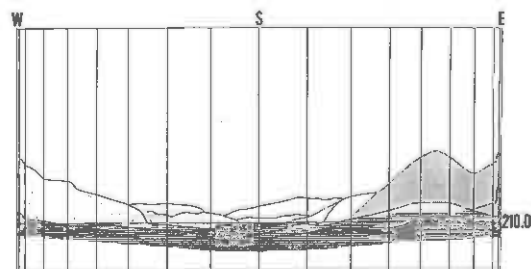
階があることがすでに多くの研究者によって指摘されている。先史時代集落に最も近いものに遺跡立地点そのものがあり、その周辺を最も熟知し開発・利用されるゾーンが取り巻く。旧石器時代なら日常的な採集活動、弥生時代であれば水田・畑地といった農耕が行なわれたゾーンに当たろう。その外には利用度の低いゾーン、更に認識されてはいるが非日常的ゾーンの順となる。当時の生業の実態が十分明かな考古学的遺跡は稀であり、どれくらいのレンジが良いか明らかではないし、時代が新しくなるにつれ社会的・政治的側面が発生し、単純にはいかなくなるが、先史時代遺跡はほぼこのようなゾーンに取り囲われていると考えて大過あるまい。先史時代遺跡の周辺環境を記述する場合には、地形や自然環境を遠距離・中距離・近距離・立地点といったレンジの異なるゾーンに分けて記述することが必要であろう。

第2には、遺跡の「景観」と「視界」の問題である。言い替えると、当時の遺跡が周りからどう見たか、逆に遺跡から周りの何がどう見たかということであり、遺跡の立地選択には、この景観と視界の善し悪しが大きく関わっている可能性が考えられるのである。

先史時代の集落が営まれる場合、わざわざ悪条件の場所を選択することはあるまい。当然、眺望・日当りなどの居住環境、生業活動に優れた場所が選地されることになる。あたかも現代の建売り住宅広告のようなもので、ある地球の一定の社会的・文化的背景を同じくする人間集団では、同じ意図をもって選択する場合、遺跡



第1図 遺跡北方の景観と視界



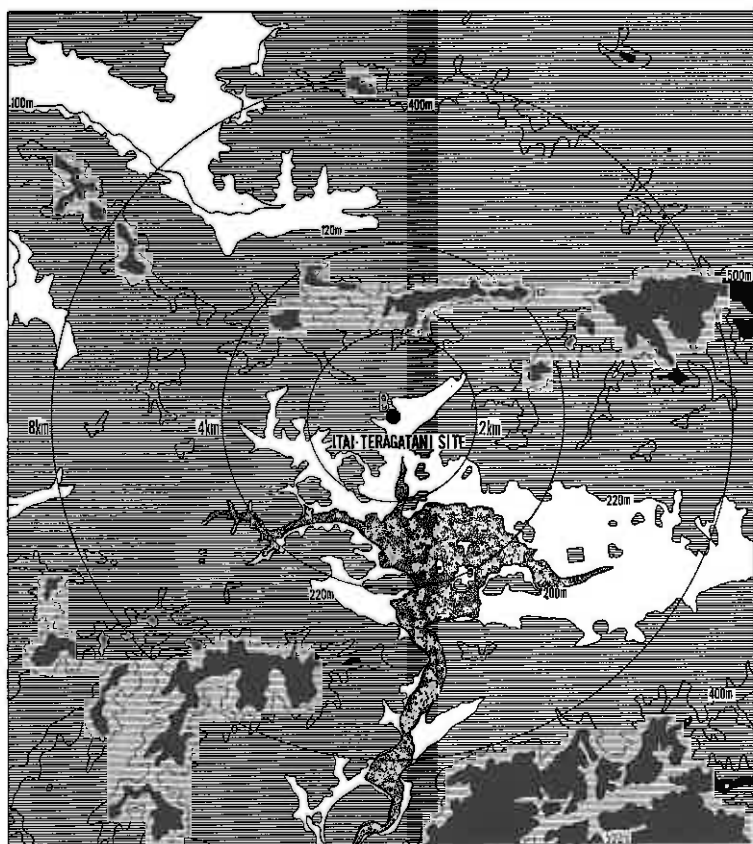
第2図 遺跡南方の景観と視界

立地が似かよったものとなることは、容易に予測できるであろう。このレベルでの検討は、地図上の情報を基に多くの研究者が行なっている。しかし、立地の景観は、従来の発掘調査報告書などでは遺跡遠景・近景として言及されたり、現状の写真が添付されたりするが、当時の意味のある地点と遺跡間の景観と視界についての記述が行なわれることは稀である。例えば、母集落からみた古墳群、神社など、隣接集落や水田からみた弥生時代集落、また、それらの逆も有り得るが、このような具体的関係においてどの様に見えたかが記述された報告書や論文は僅少であろう。

この景観と視界の関係は、立体的な空間認識の復元手段であるが、すでに都城の条坊復元に有効であることは指摘されており、古墳群や神社と母集落の関係など応用できる分野は大きい。旧石器・縄文時代においても、日照時間や近接地へのアクセスのあり方などから当時の選地に対する認識について直接アプローチできる有効な方法であろう。遺跡の環境と立地について間接的に記述を利用する研究者にはイメージしにくいのが、遺跡が周辺からどう見えるか、遺跡から周辺がどう見えるかは、発掘調査を行なった担当者が熟知しているはずである。当時と現在で景観が一変していたとしても自然科学的関連諸学の応援を受ければ、現在の景観から当時を復元できる場合も多いと考える。筆者は、景観と視界の記述は、その考古学的調査成果とともに調査者が第一に記述すべき情報であることを主張する。先史時代遺跡の景観と視界についての記述が、周辺環境と遺跡立地・生業把握に重要であり、当時の立体的空間認識という意識に立ち入れる分野であることも強調したい。

第1図～第3図は、以上のような意図をもって実践した旧石器時代遺跡の一例である。第1・2図は、遺跡中央に立った状態から南北2方向を見、ほぼ肉眼の視野に合わせてパノラマ図にしたものである。第3図は、周辺地形図で、低地に湖沼と湿地を復元してある。

紙幅が尽きたので結論を述べると、従来の先史時代遺跡の環境と立地の記述は、現代の記述者の意識に引きずられ過ぎていたと言わざるおえない。今と先史時代では自然に対する意識が違い、また生業活動などの動態も十分明らかでないため、考古学研究者はレンジをいろいろ変えて周辺環境を記述する必要がある。一方、遺跡の景観と視界を把握することは、立体的な空間認識を明らかにする有効な方法であり、先史時代の集落などを取り巻く生業活動空間や地理的認識、心象風景の一端が明かとなろう。少なくとも、考古学と自然科学的関連諸学の連携によって当時の人々の見た景観を表現することは可能であり、その意義は大きいと考える。



第3図 遺跡周辺地形図

昭和63年度調査報告

「石川・福井」地方の遺跡及び博物館

考古学等資料室所蔵の資料に関し、その出土地の確認などの調査を毎年実施し、その結果を報告しているが、昭和63年度は北陸地方石川県、福井県の遺跡の調査を行なったので、ここに記しておきたい。

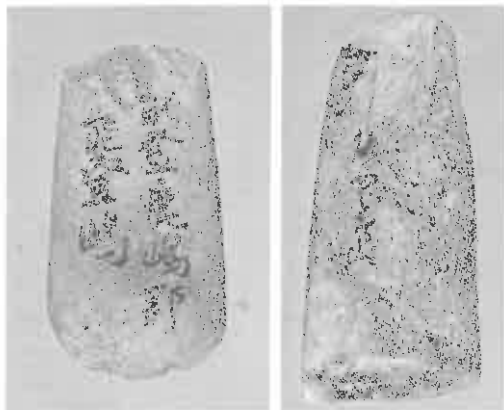
本学所蔵による北陸地方の資料として「加賀国河北郡」「越前国坂井郡」「能登国鹿島郡」出土の石器・土器等の資料が『本山考古室要録』（末永雅雄編・昭和10年）に収録されている。そこで63年度もこれら資料の出土遺跡の調査を行なうとともに、地方博物館施設について研修見学を行なった。8月31日から3日間文学部網干善教授（資料室管理運営委員長）のご指導と当該地方の教育委員会の方々及び文化財担当技師のご案内により調査を進めた。

初日の8月31日は昼頃金沢市へ到着し市内の遺跡や博物館施設を見学した、まず「尾山神社」へ参詣する。加賀前田侯の菩提所であり、幕末の地元の数学者関口開の石碑が建立されている。正面に「関口先生記念標」とあり裏面に会友従三位神田孝平謹書とある。その題字は明治の官僚政治家で考古遺物蒐集者として著名であった神田孝平氏であり、篆書の達筆で4米程の堂々たる石碑である。

続いて石川県立埋蔵文化財センターを訪問し、橋本澄夫所長のご案内にて展示室を見学させていただく。発掘器材、状態、その意義、文化財

保護等埋蔵文化財についての知識をわかりやすく説明しており、ユニークな展示として文化財保護の知識普及に役立っている。次に「石川県立美術館」を見学した。加賀百万石の城下町にふさわしい銅板葺きの屋根と白磁レンガの立派な建物と精選された美術資料展示は美術館のトップクラスに位置するものである。野々村仁清の色絵雉香炉にしばし見入った。松田権六氏の漆工芸も素晴らしい。続いて隣に位置する「兼六園」を見物した。多くの見学者で四季それぞれの美観を呈し、広大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六つを兼ねそなえる意味から兼六という園名になったと伝えられる。絵葉書を買ってシャッターを数回押した。夕方近くになったので宿舎の私学共済施設「兼六荘」へと急いだ。

翌日の9月1日は伊藤雅文氏（石川県立埋蔵文化財センター技師）のご案内にて石川県下の遺跡及び博物館施設の調査見学を行なった。早朝「石川県立郷土博物館」を見学する。この建物は旧陸軍の兵器庫を利用しており、明治末から大正初めにかけて建てられた赤煉瓦造りのどっしり建物であり、これ自体が歴史的建造物でもある。旧石器時代の終末から昭和40年代末までの石川県下の歩みが通史として理解できるように工夫展示されており、金沢市東市瀬遺跡の大型石組炉を移設復原住居、チカモリ遺跡の巨大木柱根、玉造り資料、須曾蝦夷穴古墳の石



①本学資料向田丸山遺跡出土石斧
右上下15.0cm・左右7.0cm



②石川県鹿島郡能登島町向田丸山遺跡

室の復原資料など参考となるべき資料が展示されている。その後一路北へ車を走らせ、本学所蔵資料出土地の鹿島郡能登島町へ到着する。

『能登島町史』第1巻にもこの遺跡の概要が収録されており、これによると向田丸山遺跡(写真②)と呼ばれている遺跡で、かつて土器、石器が若干採集されている。能登島町公民館、中央診療所前から農道を登りつめた畑地で、南北それぞれ100mの範囲であり、丘陵にあたる海拔10mの緩傾斜面に位置している。縄文中期後葉の遺跡で、貝殻擬縄文を主文様とする深鉢形土器や磨製石斧、石鏃が採集されており、本学資料との対比において非常に参考となるものであった。本学所蔵石斧は石質鑑定の結果チャート(chert)と(写真①の左)と流紋岩(Rhyolite)(写真①の右)である。

次に「須曽蝦夷穴古墳」を見学する。古墳時代後期の方墳で、二基の横穴式石室が東西に並置され、玄武岩で積上げられている。昭和56年1月国の史跡に指定された。朝鮮半島との文化交流を考える上で重要な古墳である。その後南下し県指定史跡「院内勅使塚古墳」(写真③)を見学する。古墳時代末期の代表的な横穴式石室で、昭和56年調査された折、義道部から須恵器(杯・蓋)が出土し年代が確定される一方、墳丘の構造が入念な版築工法による二段築造であることも判明した。現在美しく復原整備されており、七尾市の文化財保護に対する行政の前向きな姿勢を感じ頼もしく思った。続いて「能登国分寺跡」を見学し、説明を受けながらこの発掘が完了した晩には様々な遺物が発見され、国分寺解明の源がここより出るのではないかと考えた。その後周辺遺跡等見学し遅く福井市の宿舎へ着いた。第3日目は入江文敏氏(前若狹



③院内勅使塚古墳(石川県七尾市)

歴史民俗資料館学其員)のご案内にて福井県下の遺跡調査及び博物館施設を見学した。まず福井県埋蔵文化財センターへお邪魔し、本学資料出土地坂井郡十郷村・伊井村等の場所の確認を中司照世主査に教示していただく。この場所に行く途中越前朝倉氏の居城「一乗谷朝倉氏遺跡資料館」を見学する。福井市へ戻り「福井県立博物館」を見学する。久保智康氏のご案内にて館内を見学し、鳥浜貝塚出土資料、織物、伝統工芸など素晴らしい展示である。公立博物館として着実に社会教育の目的を達せられていることが感ぜられた。福井県出土資料は坂井郡伊井村(写真④)及び東十郷村であり、現在坂井郡金津町・坂井町となっている。弥生土器の出土地で現地の確認と参考文献の蒐集のみに終った。その後「三方町郷土資料館」「福井県立若狹歴史民俗資料館」を見学し、多大の教示を受け、また実地の調査が如何に必要であるかを痛感した。ご案内下さった教育委員会の方々及び関係者の皆様にお礼申し上げます。 [角田芳昭]



④福井県坂井郡坂井町清間
弥生土器出土地



⑤福井県立若狹歴史民俗資料館

小野勝年先生寄贈「始皇帝陵採集瓦当」資料

角 田 芳 昭

小野勝年先生が昭和63年12月20日急逝されました。先生を思い出すと慈父のぬくもりが伝わってきます。本学博物館学課程の精神的支柱としていただけに、これから顔が見えないとなると一層淋しく感じます。

昭和36年関西大学に末永、横田両先生のご尽力で博物館学課程が開講され、小野勝年先生が奈良国立博物館学芸課長在職の身で非常勤講師として「博物館学」を指導されることになった。実習は勿論のことであり、末永、横田先生等と共に毎週引率され京阪神の博物館を見学して廻られた。

創設初年度の受講生は卒業生で現場へ勤務されている人、大学院生、学部学生、その他の聴講生で30名。活気に満ちあふれた授業であった。(私事で恐縮であるが、筆者もこの時学部学生で友人達と先輩の後について実習の見学に廻ったものである。)そして当時の受講生は博物館あるいは研究機関へ就職されている人が多く今日指導的役割をされています。これも小野先生の並々ならぬご指導の賜であろうと考えます。先生は36年の開講以来27年の永きにわたり博物館学の講義及び実習を指導され、本学博物館学課程の基礎を築かれました。今日博物館、美術館施設へ勤務している多数の職員は小野先生のご指導を受けた人がほとんどではないだろうか。昭和50年度より筆者も博物館学課程事務全般を受持つこととなり小野先生のご指導で実習の諸準備や各地の実習見学の引率で一緒にさせていただいていた。昭和52年度より実習学生の意見

をとり入れられ、展示発表会を時間割に組込まれた。実際に実技がどの程度身についているか、どれだけの知識を取得しているかを知ることによって指導方法も考え直さなくてはならないと申し出られ、11月に学内の実習室において学生による展示発表会が催されることになった。先生は精力的にご指導され、発表会には学内の多くの実習の担当者が見学され、大方の好評を得た。反省会においても、学芸員のたまごとして実際に実習展を開催したことに多くの満足を感じたと学生は語ってくれた。先生も指導した甲斐があった、以後続けてやってみたいと満足に話されていたのが印象に残っている。また『阡陵』の原稿や『紀要』への執筆をお願いしたときも心良く引受けて下さり、おかげで欠号にならずに済んだこともありました。昭和54年度頃より学芸員資格取得の希望者が増大したので1クラス増設し60名となったことを報告すると、現在の人数でも指導が充分出来ないのにこれ以上となると実習が大変になるのではないかと危惧されもした。しかし決まった以上やるしかない、以前にも増して指導され、特に実習展の企画については、最初の授業よりその計画について話されていました。

今日本学博物館学課程が多少なりとも社会的評価を受けているのも、小野先生の熱意あるご指導があったからこそと感謝している次第です。昭和63年奈良において「シルクロード博覧会」が開催され、その見学終了後、奈良市高畑本薬師町の先生の御宅を訪問した。お茶とお菓



秦始皇帝陵『図説古代中国5000年の旅』より



始皇帝陵採集瓦当 ①

子をいただきながら雑談の中で博物館学課程のことに話が及ぶと俄然、熱心に話し出され、開設当初の頃より話し始められた。開設された頃は受講生も教師も一体となって熱気があった。現在は人数との関係かも知れないが、学生が消極的で、覇気がないように感じられる。資格のみとりに来て学問する人が少なくなった。淋しいねと語られた。「誠にその通りです。でも真面目な学生も多いので今後も発展していくでしょう」と答えた。その時「俺も今後はいつまで続けられるかわからないので、私の蒐集した若干の資料の中の一部を関西大学へ寄贈するので役立てほしい」と申し出られた。そして古布に包まれた瓦当を差し出された。「始皇陵出土瓦片」4点と「長安青龍寺瓦片」1点の計5点であった。ありがたく受取り、中国関係展示資料のケースへ展示したいと考えていた。

また龍谷大学東洋史学研究室より『中国隋唐長安寺院史料集成』（法蔵館）の學術書が文部省科学研究費の助成で来年3月（平成元年3月のこと）発行されることになった、とそれについて諸々に語られた。（小野先生は昭和42年より龍谷大学教授として勤務されていた）先生の博識にはいつも感心させられ、じっと聞き入った次第である。約2時間程お邪魔し帰り際「先生早く良くなって講義に来て下さい」「いろいろお世話になるが宣敷く頼む」といわれ手を差し出された。にぎり返した手は大きく暖かった。それが急逝されるとは、これも運命であり、寿命であったのであろうか。寄贈された資料をこの機会に紹介し、先生の霊前にご報告させて

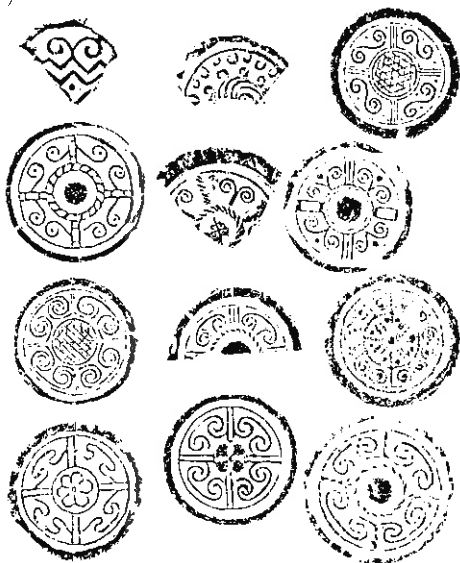
いただく。

この資料は裏面にも記されている如く。関西大学史学科主催における中国學術調査団の一員として昭和55年（1980）7月訪問された時採集されたものである。「始皇陵北門址ニテ拾得、小野勝年、時ニ72才、秋日快晴一人墳項ニ立ツ」と蕨手文瓦当の裏に記されており、出土地の判明している貴重な資料である。「始皇陵」は中華人民共和国陝西省臨潼県驪山に所在する秦の始皇帝の陵である。中国における帝王陵のうち、もっとも著名なもので、二段に造られた方墳で東西345m、南北350m、高さ76mである。この陵墓の東の外壁から、さらに15キロほど東にはなれたところに、陶製の大軍団をおさめた3つの兵馬俑坑が発掘され、皇帝の偉大な権力が実証された。また1980年10月この陵墓のすぐ西側で精巧な鍍金の銅馬車が発見され話題となった。

蕨手文瓦当はこの始皇陵をはじめ、戦国時代斉の臨淄城址よりも出土しており、漢代遺物と一緒に発掘されている。また漢代の魯の曲阜城址、牧羊城址よりも多量に出土している。蕨手文様の起源は神農思想より雲文の変形、あるいは動物文の変形とも考えられている。これらは前4世紀中葉以降のある時期から製作され、秦始皇帝が即位した前3世紀中葉には相当量盛行していたものと考えられる。（次ページへ続く）



始皇帝陵採集瓦当 ②



瓦当蕨手文様の拓影『中国の都城遺跡』より

そして漢の勃興と共に蕨手文瓦当の使用地域が中国全土に及んだと推定される。隋唐代にはこれに変わり「蓮華文」が発達してくる。

図1は上下10.0cm・左右7.4cmで胎土は赤褐色を呈し堅く焼きしめられている。4つの外区に蕨手文様を配し、中房は斜格子文を配している。図2は上下12.5cm、左右7.4cmで赤褐色の胎土である。

他に長安青龍寺と書かれた瓦片がある。青龍寺は唐の長安左街新昌坊にあった。もと隋の文帝が582年建てた靈感寺で、唐初に廃せられた

が、662年観音寺として再建され、さらに711年青龍寺と改称せられた名刹で、空海、円仁、円珍等の留学僧もここで学んだ。小野勝年先生の思い出はつきないが、ここに謹んで先生のご冥福をお祈りするとともに、この資料がきっかけで、中国古代史に興味を抱く学生が1人でも多く増えてくれたら、地下の先生も微笑されることであろう。

(註) 参考文献

秦葵文瓦当考 飯島武次『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号 1983

◎『関西大学考古学等資料室紀要』第6号目次

- 舍衛城と祇園精舎(覚書三)
 - 佛典にみる祇園精舎創建縁起(一) — 網千善教
- 近世初期風俗画における群像構成について(一)
 - 旧三條家本及び上杉家本洛中洛外図屏風の場合 — 山岡泰造
- わが国における文書館制度の現状と問題 芝村篤樹
- 神田孝平の官歴について 角田芳昭
- 資料紹介「津雲貝塚の土偶」 大下 明
- 馬野繁蔵氏寄贈 採集資料報告〔V〕 瓦編(Ⅱ) 考古学研究室
- 昭和63年度「博物館実習総括」 博物館学課程

編集後記

肝陵第19号をここにお届けいたします。

今回の原稿も網千教授の本学100周年記念事業「祇園精舎」発掘調査概要、そして加藤教授のイラン考古学者の原稿、松浦教授の前回に引続いての中国調査関係の原稿、非常勤講師山口卓也先生にもご無理をお願いし遺跡の景観と視界についての原稿をいただいた。諸先生には感謝申し上げます。

本学博物館学課程が昭和36年に開講されて以来、引続き27年間の永きにわたり講師を勤められておられた小野勝年先生には、今後ともご指導いただけるものと信じていたら、昨年暮急逝された。痛恨の極みであります。本学の博物館学課程は末永雅雄、横田建一両先生のご尽力と、小野勝年先生の眞摯なご指導のもと、また多くの諸先生方のご指導で、今日の充実した内容の課程となり、多数の優秀な

学生が学芸員資格を取得して巣立っています。先生にご指導を受けた我々としても、本学の博物館学課程が一層充実発展していくよう精進していかなくてはと考えている次第です。諸先生方のご指導特にお願ひ致します。

表紙の写真は「縄文土器」であり青森県木造町亀ヶ岡遺跡出土と伝えられる資料である。壺形土器で器面全体に赤褐色の漆が塗彩された土器である。胴の張りが、頸の径に対して大きい。縄文晩期大洞C₂式土器と呼ばれる資料である。優美な形体を成している。この亀ヶ岡遺跡は早くから知られ元和9年(1623)『永禄日記』にも記録されており優秀な土器が多量に出土し話題となった。養虫散人が発掘し、神田孝平へ贈った資料と伝える。総高13.0cm [角田 芳昭]